「地域と環境」No.17　2023.3

# 近代期瀋陽の北市場の実態に関する一考察

## A study on actual situation of Beishichang in modern period Shenyang, China

石　田　　曜
Yo ISHIDA

本稿は近代期瀋陽（奉天）における北市場を事例に，当時の中国における盛り場の実態を考察するものである。満鉄付属地と城内の中間地点に位置する北市場地域は満鉄付属地側と城内側にとって周縁としての性格を有している。また，その市場としての性格について，日用品雑貨類を中心として販売しており，雑多で喧騒な場所という実態であることが明らかとなった。

キーワード：盛り場，北市場，近代期，瀋陽
Key words：amusement place, Beishichang, modern period, Shenyang

## Ⅰ　はじめに

### 1　問題意識

盛り場とは「一般的に『人の多く集まる場所，繁華街』をいう。都市の真中にできる。買物・お付合い・娯楽・鑑賞・教養・散歩など，市民の日常生活において，人が盛る場所」（服部 1981）とされる。この定義から，盛り場は商店街，繁華街，歓楽街，公園などの場所を指すことがわかる[1)]。盛り場研究については社会学や地理学，歴史学から豊富な研究蓄積がある。なかでも海外の盛り場を対象としたものとして，張（2008）は台北市の日本植民地政府によってつくられた「文明的施設」を実際に生活していた人々がどのように空間的行動を通して再定義・再創出したのかを分析した。そこでは，4 つの盛り場を事例に，断続的に人々が余暇活動をすることで更なる盛る場を創出し続けたことを指摘している。このように今後は海外の盛り場についても考察を深めていくことが必要といえよう。

本稿では 1931～1945 年の期間における瀋陽（奉天）の北市場という盛り場について，その実態の一端を捉えてみたい。『日中辞典』（北京・対外経済貿易大学・北京商務印書館小学館編 1991）の盛り場の項目を見ると繁華街・繁華地区・閙市・熱閙場所と説明がある。ここからみても，盛り場は繁華街や「閙」といった賑やかな場であるといえる。こうした中で，岳（2019）は雑吧地という空間に着目し，それは元々は北京の方言であるとし，主に天橋地域を指す呼び方だと述べている。岳は都市生理学の視点から「古今東西，雑吧地は一つの空間であり，ひとつの偉大な都市の真の生態と常態であり，ひとつの都市の発展のための動力およびそれを助ける力であ

る（岳 2019: 11（筆者訳））」と述べている。本稿ではこの雑巴地を盛り場と同質のものとして捉えている。雑巴地兒は雑巴地とも表現される。

用語について，現在の瀋陽と満州国期の奉天は地名が異なるため，都市を指す場合は「瀋陽都市」に表記を統一する。また，本稿で使用する資料は主に地図類，地方誌，旅行記，旅行案内などである。

## 2　先行研究

近代期の瀋陽都市に関連する既往研究は多数あるが，ここでは北市場及び商埠地を対象としたものを概観してみたい。張（2017）は瀋陽（奉天）の雑巴地兒（以下，表記を盛り場に統一）の形成過程とその特徴を考察し，盛り場を瀋陽都市の発展のミクロな縮図であるとし，清代の瀋陽都市建設から盛り場の変遷を追っている。張（2017）は初期の盛り場を城内西門付近であるとし，そこに食堂や粥舗，茶館，鞋舗などが立地していたとする。1923 年に城内の改造が行われ，そこで大西門から小西門へ路面電車が引かれ，こうしたなかで周囲に回回営や奉天第一商場が開かれた。そのほかにも，都市部では城内の南東角の小川に沿った場や万泉公園が，そして近郊では新民県の老翁廟頭，遼中県の関帝廟附近，康平県の褲裆街などが盛り場であったという（張 2017: 643）。ただ，張（2017）の研究では北市場に言及しているものの，概観にとどまっている。中国人民政治協商会議・遼寧省委員会文史資料委員会（1992: 1）は，北市場や南市場には様々な商いや職業，そして旅芸人が皆集まる場として雑巴地を形成したとあり，ここから盛り場と性格を持つ言葉と捉えられる。近年，北市場に関する研究成果が徐々に発表されてきたものの，多くはその形成史に関心があり，盛り場としての実態に触れるものは少ない。

次に，中国における既存研究では満州国期以前の商埠地に対する政府の態度やインフラ整備，土地の等級などが検討されている。商埠地とは「外国人の居住及び貿易のために提供される（李・中島 2014: 671）」区域を指す[2]。商埠地に言及する理由は後述するように，北市場がこの空間に属していること，そしてこの空間は各主体の思惑が交錯する複雑な性質を有することによる。橋谷（2004: 13）は日本による植民都市を 3 類型に区分し，その中で瀋陽（奉天）は「既存の大都市の近郊に日本が新市街地を建設」したものとし，「これらの都市では，中国人街と日本人街がまったく別個の都市空間を構成するとともに，両者の連結あるいは対抗がさまざまな形で残っていく」としている。

商埠地に関する研究は，清代末期から満州国建設までの時期を対象としたものが多く，そこでは主に日本側と中国側の鉄道開設や土地をめぐる政治的・経済的な思惑に焦点が当てられている（王・董 2010, 孫・曲 2012）。また，建築学では李・中島（2014）や李（2017），歴史学からは殷（2011, 2012）が商埠地の発展や都市計画とそれによる空間形成の特徴，そして都市や人々の生活へ与えた影響を分析している。そこでは清末の商埠地における馬車鉄道や電気鉄道の敷設をめぐる日本側と中国側の思惑の交錯や葛藤が考察されている。商埠地は日本側と中国

側の 2 つの主体の政治的思惑が交錯する場所であったことは明らかであり，同時に日中双方にとって異質性，周縁性を持ち，それが盛り場という場所の形成につながったと考えられる。

## Ⅱ　瀋陽都市と北市場

### 1　近代期の瀋陽都市と盛り場

近代初期の瀋陽都市は城内・南満洲鉄道付属地（以下は満鉄付属地）・商埠地に 3 区分され，それぞれの地域で独自の景観がみられる（瀋陽市人民政府地方志編纂辦公室編 1994）。城内[3]は春秋戦国時代の侯城にまで遡ることができ，明代の洪武 19 年（1386）には瀋陽中衛が設置され，煉瓦造りの城壁へと改修された（竹内ほか編 2017: 667）。清代には副都として盛京故宮が置かれた（竹内ほか編 2017: 667）。歴史的にみても瀋陽都市は東北地域の政治や経済的な中心地であったことがわかる。城内にはさらに内城があり，これが盛京故宮である。方形の形と「井」字の街路を有し，それぞれの街路から放射状に城内縁辺部の城壁へ街路が伸びている。

満鉄付属地は日露戦争後に東清鉄道の南半分を継承したものであり，都市形成の進展とともに鉄西区や日本人街が発展していった（張 2008）。奉天駅を中心として北の浪速通りと南の平安通りが放射状に伸びる。それぞれの通りは短冊形のブロックを囲むように形成されており，初期段階では城内との接続を考えた様子はうかがえない。

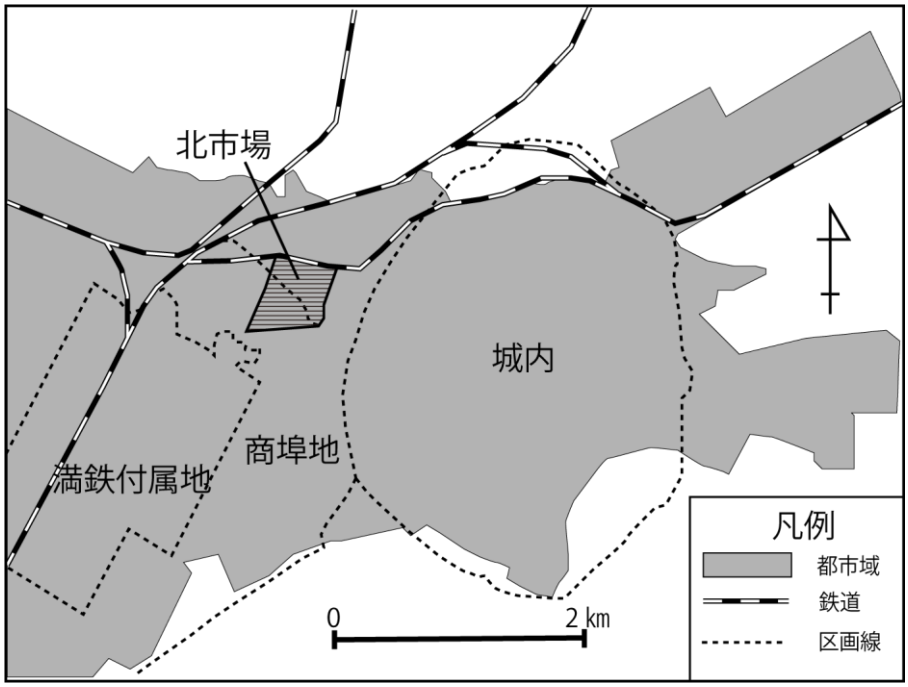


図 1　瀋陽都市と北市場の位置

注）昭和十一年測量同十三年製版 1/25000「奉天」より筆者作成。

商埠地は1908年4月に徐世昌によって「奉天各埠租地簡章」が制定され，城内と満鉄付属地の間を埋めるように開設された（李・中島 2014）。商埠地では土地の優遇政策がとられ，商業および市場が発展したとされるが，既存の経済状況ではその発展の需要が満たされなかった（張 2017）。初期の商埠地は中国現地政府によって管理されていたが，街路自体は城内と満鉄付属地を結ぶようになっている。ただし，両地域を結ぶために道路は不整形なものとなっており，街区の向きなども統一されていない。当地域は1918年に奉天省長の王永江によって北市場と南市場が開設されることとなった（張 2017）。小西辺門から新民県へ向かう道と城内と満鉄付属地を結ぶ幹線道路の間が後に北市場として発展していった（図2も参照）。ここには劇場や賭場，大商店，薬屋，旅行社，理髪店，銭湯，写真館，煙館，書場が立地していた（中国人民政治協商会議・遼寧省委員会文史資料委員会 1992，張 2007）。こうした3つの異なる目的・計画によるモザイク状の都市が形成された（張 2008: 108，越沢 2002: 62）。

満州事変以降，1937年1月に奉天市都邑計画の区域が決定し，同年4月1日には市制が敷かれた（奉天市公署 1943）。政府は計画区域の決定後には地籍整理を開始し，3月5日に市街に隣接する14の村を市域に編入した。そして，1938年に奉天市区制が実施されることとなった（奉天市公署 1943）。この市制では，元々は全市を11区による制定市域，そして郊外地域を第一から第六までの農業地区としてそれぞれ辦事処を配置する予定であったが，その後に農業地区の案は廃止され，17の区に分割することとなった（奉天市公署 1943）[4]。『奉天統計年報　No.7 康徳十年版』をみると，1942年には総人口1,577,176人，総面積262㎢であった（市公署・商工公会・中銀分行・労務興国会共編 1943）。

大阪毎日新聞社編（1936）では盛り場について，満鉄付属地には春日町，青葉町，千日中店，十間房歓楽境，柳町，平康里とあり，城内および商埠地には四平街，南市場，北市場とある。また目貫通りとして浪速通，千代田通，平安通，高千穂通，十一緯路，大西関大街，小西関大街，城内四平街と記載されている。当時の主な繁華な場はこうした地点であったことが窺い知れる。このうち，北市場及びその周辺地域の盛り場としては，十間房歓楽境，柳町が挙げられる。

## 2　北市場の形成

北市場は瀋陽都市[5]の中央部に位置している（図1，図2）。1943年段階では，北市場が立地した敷島区は人口94,345人（全体の6%），面積2,164㎢（全体の0.8%）であった（市公署・商工公会・中銀分行・労務興国会共編 1943）。

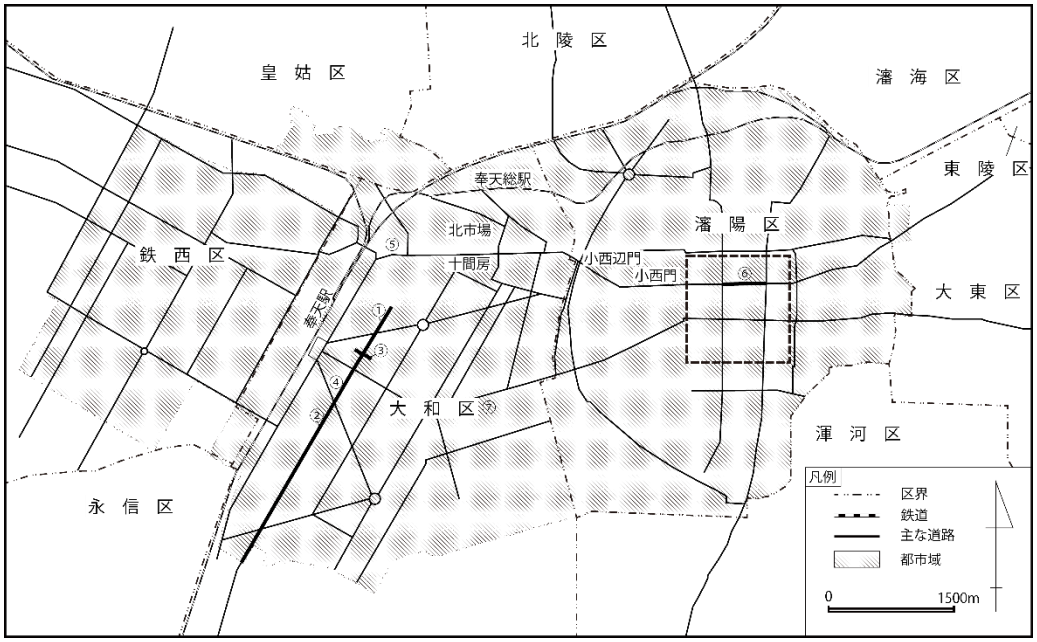


図２　1939年前後の瀋陽都市

注）①春日町，②青葉町，③千日通，④平康里，⑤柳町，⑥四平街，⑦南市場
基図：奉天市公署都邑計劃科『大奉天新區劃明細地圖』滿洲日日新聞社

その変遷について，城の西部には広寧（現北鎮県）へ向かう道と新民県へ向かう道の 2 本があり，このうち新民県へ向かう道の途中に北市場の前身となる地域が形成された（劉 1995）。清代に皇寺などの寺院が建設され，20 世紀初めには満鉄付属地と城内をつなぐ幹線道路に 3, 4軒のレンガ造りの家屋と6, 7軒の藁葺の家屋が並び, これは十間房と呼ばれていた(劉 1995)。この十間房は1906年に開通した城内と満鉄付属地を結ぶ幹線道路の両側に位置しており，日本人の商業活動を規制する目的を有した清国側と商業の拡大を図りたい日本側の擦れ違いが最も顕著であった場でもある（李・中島 2014）。既述した通り，北市場は敷島区に配置され，この区は康泰街・厚生街・協和街から成っていた。1937年には商埠地に奉天市公署が置かれている。橋谷（2004）によると，この奉天市公署は満鉄付属地，商埠地，城内を一つにまとめるために，偏りが生じないような立地条件が選ばれたとされる。北市場はそのすぐ東側に位置し，幹線道路から一つ奥へ入った地域を中心といいていた。このように，満鉄付属地と城内の中間地点に位置する北市場地域は満鉄付属地側と城内側にとっては緩衝地帯でありながら，周縁としての性格を有していたといえる。

## 3　北市場の形態

ここで主に地図から読み取れる北市場の形態の変化を捉えてみたい。なお，本節で扱った地図類は表１にまとめた。

表1　本稿で使用した主な都市図

| 番号 | 図名 | 図版の年 | 縮尺 | 製作・出版社 | 作者・編者 | 所収資料名 | 出版社 | 年 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | FENG-TIEN(MUKDEN) | 1913 | 1/20,000 | The Imperial Japanese Government Railways（鉄道院） | The Imperial Japanese Government Railways（鉄道院） | 近代アジア・アフリカ都市地図集成 | 柏書房 | 1996 | 『An Official Guide to Eastern Asia, Vol. 1, Manchuria & Chosen』に収録された各都市地図（縮小版） |
| 2 | FENG-TIEN(MUKDEN) | 1920 | 1/20,000 | The Departmen of Railways（鉄道省） | The Departmen of Railways（鉄道省） | 近代アジア・アフリカ都市地図集成 | 柏書房 | 1996 | 『An Official Guide to Eastern Asia, Vol. 1, Chosen & Manchuria, Siberia』に収録された各都市地図（縮小版） |
| 3 | 最新奉天市街圖 | 1926 | 1/15,000 | 濱井松之助 | 濱井松之助（東京、編輯兼發行者） | — | — | — | 国際日本文化研究センターの所蔵地図データベースより閲覧。 |
| 4 | 大奉天全圖 | 1934 | 1/15,000 | 大阪屋號書店（發兌） | 濱井松之助（編輯兼發行者） | — | — | — | 国際日本文化研究センターの所蔵地図データベースより閲覧。 |
| 5 | 大奉天新區劃明細地圖 | 1939? | 1/15,000 | 満洲帝國協和會奉天市公署分會 | 満洲日日新聞社 | — | — | — | 康德六年二月版。国際日本文化研究センターの所蔵地図データベースより閲覧。 |

1913 年と 1920 年の『FENG-TIAN(MUKUDEN)』をみると，城内と満鉄付属地を結ぶ幹線道路沿いには政府機関，その周囲には公園や寺廟，各国領事館がみられ，劇場である奉天座も敷設されていることがわかる。当時の商埠地は正界，副界，予備界に分類されており，北市場はこのうち正界に属する。奉天座の北西部には「露国墓地」があり，寺院や廟，墓地が散在している。このことから，政治や宗教，娯楽など様々な機能を持った施設が集積する場所であることがわかる。また，満鉄付属地の病院などの医療と関連する施設と接しており，後に日本側の盛り場として有名となる柳町に該当する施設がみられる。

1926 年の『最新奉天市街圖』からは同地域には大きな変化は見られないが，奉天毎日新聞社などの商業関連の土地利用が確認できる。また，この地図からは若干の地形的特徴が見て取れる。新民県へ向かう道は十間房の並ぶ幹線道路と比べて，地形が低いところを通っており，墓地はその周囲に立地している。こうした墓地は『大奉天全図』(1934) や『大奉天新區劃明細地圖』（1939）をみると後に奉天紡紗廠となっている。

1931 年の満州事変を経て，満州国が成立して以降，北市場周辺はどのように展開していったのであろうか。『大奉天全図』（1934）では，十間房の南北地域の区画が急速に整備されていることが読み取れる。さらに東西の通りを「〇〇緯路」，南北の通りを「〇〇経路」と統一して表記している。北市場では，奉天駅から城内へ向かって引かれた奉山鉄路の途中にある奉天総駅から新民県へ向かう道へ直行するように道路が引かれ，そこには学校や会社が立地している。新民県へ向かう道には露天市場の文字がみられ，その先に西北市場がある。中国人民政治協商会議・遼寧省委員会文史資料委員会（1992）には北市場地域には北市場と西北市場の 2 つがあると明記されており，新民県へ向かう道が商埠地と北部の境界になっていることから，両市場は行政的な違いがあると考えられる。

『大奉天新區劃明細地圖』（1939?）には区画整理以降の情報として北市場地域を康泰街と厚生街に区分して記載されている。これまで周縁であった当地域はこの時点で都心部に包括されたと考えられるだろう。北部では北陵区・皇姑区，西部では鉄西区・永信区，南部では渾河区，そして東部では瀋海区・東陵区・大東区が郊外地域として開発が進んでいった。

以上，地図から見て取れる北市場の形態的変化を簡単に概観した。では，次にその実態について簡単にみてみたい。

## Ⅲ　北市場の「喧騒」

当時，北市場には様々な遊興の場があった（図 3）。こうした盛り場を構成する要素として欠かせない施設の研究は焦（2017）によっていくつかまとめられている。焦は煙草工場などの工業機能や金融などの商業機能のほかにも，様々な娯楽機能をもった施設があるとし，飲食業，茶社，サーカスなどの業種を挙げている。また，書肆や戯園，影園，書場についても言及している。次に，中国人民政治協商会議・遼寧省委員会文史資料委員会（1992: 1）は，瀋陽都市にあばら家が多かった頃，軍閥や官吏，豪商などは商埠地の南市場や北市場に居り，土木作業やレクリエーションの場を経営し，それと同時に飯館や浴池，妓院，客桟，烟館，賭局，銭号なども盛んに営業していたとしている。こうした北市場の「喧騒」について，ここでは試みに市場の様子からその実態を検討してみたい。

奉天商工公會（1940）では，奉天における生鮮食品市場について中国側の市営市場，日本側の満州市場株式会社経営による小売市場，中国側の私営市場の 3 種類が記載されている。そのうち中国側の私営市場については 7 か所[6] があり，ここには北市場の名称は出てこないが，隣

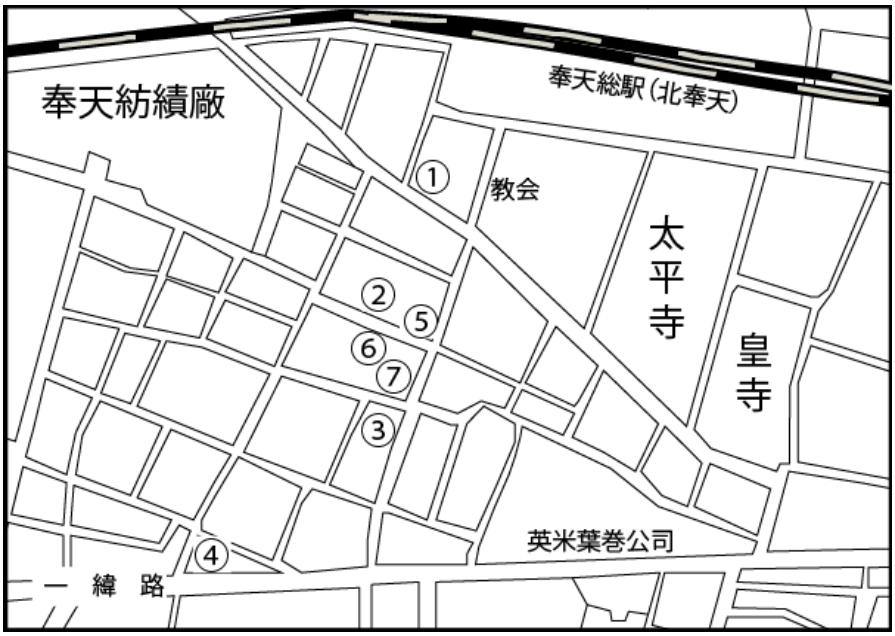


図 3　北市場の詳細図

注）①保安映画館，②浴場，③瀋陽評劇場，④奉天劇場，⑤大観茶園，⑥雲福映画館，⑦天河浴地

基図：昭和十一年測量同十三年製版 1/25000「奉天」

接する皇寺に菜場があることがわかる。一方，中国側にはまた「勧商場式」の日用品雑貨類小売市場があるとし，こちらも7か所の記載がある（奉天商工公會 1940: 95）。そのうち北市場には，北市商場と民生商場の2か所記載されており，店舗数も前者が96，後者が12と比較的多い。

こうした日用品雑貨類の売買の様子は染木（1941）の記述からもうかがえる。

*「北市場（ペイスジヤン）は農具・工具・家内道具等現在市内及市外の民衆生活に必須の物の集散する所でそれ等の民具は生き／＼と店頭に並べられ，足を有し，翅を生じて活動の時を待つてゐる。民衆が鵜ノ目，鷹ノ目で少しでも好い品物を少しでも安く買はうと喧騒して歩いてゐる。それ等の市民を目あてに餅子（ピンツ），花生（ホアシヨン），油糕（ユカオ）等の大道商人が此處を先途と聲をからして呼びたてゝゐる。道路の中央は物凄い泥濘で，馬車（マアチヨ）が馬の踝まで泥に浸して少しでも割の行くお客を漁つてゐる。*

*（中略）*

*城壁の露天市場はこれとは違つてゐる。北市場では物を翅を生じようとし人は眼を鷹の様にしてゐる。すべてが活動的で，喧騒で，消費的である。城壁の下は路幅も狭く，店も小さいが戸をしめた中には品物がぎつしりつまつてゐる。物は動こうとはせず，何時までも同じ所に轉がつて何時どこかの賢明な人が起用して呉れるのを待つてゐる。人も何と云ふことなしに掘り出し物でもあつたら位の氣持で歩いてゐる。北市場では一日買ひ損へば明日再び其の品物は現はれないのに比して城壁では幾箇月も同じ所に轉がつてゐる。見込んだ人は一週間目毎にやつて來ては價をこぎつてゐる。賣手も終に根負けして此方の面子（メンツ）を立てる。（後略）」*

ここでは北市場と城壁附近が対比されながら描写されている[7]。北市場は「活動的」・「喧騒」・「消費的」な商売の場所として書かれている。この記述からは主に中国人の商売人が「民衆生活に必須の物」を売買しており，商売のやり取りの速さが際立つ様子がうかがえる。

## Ⅳ　小結

本稿では，満州国期の瀋陽（奉天）における北市場の形成と盛り場としての実態についてみてきた。主にここでは北市場の形態的な特徴とその周縁的性格を捉えてきた。また，その商業的機能への着目から，北市場は日用品雑貨類を中心として販売しており，雑多で喧騒な場所であることが分かった。

しかし，ここでは断片的な要素を繋ぎ合わせることで北市場を部分的に復元したに過ぎない。近代瀋陽（奉天）には商店街的盛り場として満鉄付属地の春日町，城内では四平街が存在する。また本稿では触れてこなかったが，北市場は花柳街が集中した地域でもある（中国人民政治協商会議・遼寧省委員会文史資料委員会 1992）。こうした要素にアプローチする視点も必要とな

る。

水内（1985）の述べるように，植民地都市では様々な民族が居住分化（あるいは階層別居住分化）しており，人口の変遷が都市の形態や構造に大きな影響を与える。本稿ではこうした点に加え，北市場を都市変遷の中で位置づけることができなかった。さらに「生きられた空間」として北市場を見ようとすると，実際の各娯楽施設の位置比定，人々はこうした施設をどのように利用していたのか，またどのようにこの地域が管理されていたのかなど，数多くの課題が残されている。今後も引き続き調査・分析を続けてきたい。

（山東師範大学外国語学院）

【謝辞】本稿の作成にあたって，2019 年 9 月 3 日～9 日の期間，瀋陽市和平区北市場街道にてフィールドワークを実施した。調査では瀋陽市北市場街道辦事処の方々に大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

【注】

1）盛り場は様々な学問分野から定義されている。例えば，社会学から吉見（1987）は「商店・娯楽施設等が集中し，恒常的に多数の人びとが集まる地域として，商店街や繁華街，あるいは歓楽街とほぼ同様の意味で，都市のなかの商業的・文化的諸施設の集中した地区」としている。この盛り場について，これまで地理学では主に機能論的立場とそこに生きた人々の視点という 2 分類から研究が行われてきた（牛垣 2008）。特に，「生きられた空間」を分析するものとして代表的な研究に山田（1994）と加藤（1997, 2002）が挙げられる。山田（1994）は「単に娯楽施設や商店が集積している繁華街というわけではなく，人々が自由や交流を求めて集まり，それを享受する空間である。そして為政者側の規制と人々の反発が交錯する」とし，名古屋を事例に，居住者や都市計画家がどのように盛り場を捉え，生きる中で実践を行ったのかといったことについて分析している。一方，加藤は盛り場を社会的構築物として捉える立場といえる。加藤は大阪千日前や神戸を事例に，盛り場について場所を取り巻く政治家や特定業者，警察によって創出され，変容し，消滅する過程を系譜学的に分析している。

2）李・中島（2014）や李（2017）によると，9 世紀末からロシアと日本は相次いで中国東北部へ進出し，鉄道の敷設と運営にともない，沿線駅付近に土地を取得し，市街地の造成を進めた。同時に，清政府は万国通商場として商埠地を開設し，外国商人の招致を目指した。東三省総督の徐世昌によって，日本とロシアの侵攻に対して，自国の主権を維持するために空間的隔離を目論む意図があったとされる。

3）城内は従来の瀋陽城を含んだ円形の城壁の内側を指す。満鉄付属地は正式には南満州鉄道付属地と称される。最後に商埠地は，越沢（2002）によると「開埠通商」（外国人に交易地として開放）を指し，各都市の官憲が満鉄付属地の経済的優位性に対抗するために設置した。また，現地人や日英米などの外国人の雑居を防ぐ要素も含まれた（越沢, 2002）。

4）17 区とは瀋陽・大西・小西・北関・東関・大和・敷島・朝日・鉄西・大東・皇姑・渾河・永信・于洪・北陵・瀋海・東陵の各区を指す。

5）瀋陽市人民政府地方志編纂辦公室編（1994）によると，当時の政府が清代に北京に遷都した後，盛京には奉天府を設置し陪都とした。以降，名称に若干の変化が認められるものの，満州国期には奉天と呼ばれた。中華人民共和国成立期には再び瀋陽市に戻された。

6）西市場（大西辺門外南一経路），五斗居菜場（大西関五斗居），皇寺菜場（小西辺門外皇寺大街東頭），南市場菜場（南市場），小東門内菓実場（城内小東門内），小西門内菓実場（城内小西門内），南一経路菓実場（大西辺門外南一経路）の7か所。

7）この城壁沿いの市場について，南滿洲鐵道株式會社（1928）には「*内城の外側をめぐつて大西門から城郭の東南角までは細長い市場を形造つてゐる。その商人の分布を觀るに大南門から城郭の東南角までは野菜，獸肉，家具商が多く，大南門と小南門との中間には雜貨，骨董品店が多くて旅客の好奇心をそゝる。大南門から城郭の西南角までは衣類商人，そこから大西門までの間には金物商や小さな骨董商人が多い。滿洲に見る此種市場としては狹長な地形を占據してゐることゝ，又大西門から大東門までの間が，早朝自由勞働者の群れて需給される市の立つことゝが特徴である*」とあり。また大阪毎日新聞社編（1936）には「*市場　内城の外側，城壁に沿って大西門から大東門にいたるまで狹長な市場が形成されてゐる，特に骨董は旅客の好奇心を惹き奉天名所の一つとなつてゐる*」とある。内城の城壁の南部の囲むようにして市場が形成されていたことがわかり，こうした一帯を指していると考えられる。

【参考文献】


殷　志強 2011．奉天市政公所の水道計画に関する考察．現代社会文化研究 51，15-30.

殷　志強 2012．1920 年代における奉天市電車敷設をめぐる曲折．現代社会文化研究 53，91-107.

牛垣雄矢 2008．地理学を中心とした盛り場研究の現状．地理誌叢 50-1，53-59.

大阪毎日新聞社編 1936.『日本都市大観　昭和 11 年版』大阪毎日新聞社.

加藤政洋 1997．盛り場「千日前」の系譜．地理科学 52-2，71-87.

加藤政洋 2002.『大阪のスラムと盛り場―近代都市と場所の系譜学』創元社.

越沢　明 2002.『満州国の首都計画』ちくま学芸文庫.

市公署・商工公会・中銀分行・労務興国会共編 1943.『奉天統計年報　No.7　康徳十年版』.

染木　煦 1941.『北満民具採訪手記』座右実刊行会.

竹内啓一ほか編 2017.『世界地名大事典 1　アジア・オセアニア・極 I〈ア-テ〉』朝倉書店.

張　暁紅 2008．「満州国」商工業都市：1930 年代の奉天の経済発展．三田学会雑誌 101 -1，107-122.

張　紋絹 2008．植民地台湾における台北市の空間創出―盛り場「西門町附近」を中心に．大阪大学日本学報 27，17-41.

橋谷　弘 2004.『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館.

服部銈二郎 1981.『盛り場―人間欲望の傑作』古今書院.

奉天市公署 1943.『奉天市要覧　康徳十年』奉天市長官房総務科.

奉天商工公會 1940.『奉天經濟事情』奉天商工公會.

南滿洲鐵道株式會社 1928.『奉天地方案内』南滿洲鐵道.（滋賀大学経済経営研究所収集資料&デジタルアーカイブ検索システム：https://mokuroku.biwako.shiga-u.ac.jp/keywords/39220）（2022 年 4 月 3 日閲覧）

水内俊雄 1985．植民地都市大連の都市形成―1899～1945 年．人文地理 37-5，438-455.

山田朋子 1994．都市の近代化における「盛り場」の位置付け―名古屋の事例から―．大阪大学日本学報 13，123-146.

吉見俊哉 1987.『都市のドラマトゥルギー―東京・盛り場の社会史』弘文堂.

李　　薈・中島　伸 2014．清末日中対立下の中国東北部における「奉天商埠地」の形成に関する研究．都市計画論文集 49-3，669-674.

李　　薈 2017．20 世紀初奉天における都市形態の変化と商埠地の発展に関する研究．富士ゼロックス株式

会社.

中国語文献
焦　　楠 2017.『瀋陽北市場沿革研究（1920-1949)』遼寧大学修士論文.
劉　洪儒 1995. 旧瀋陽的"雑巴地". 文史精華 4, 58-62.
瀋陽市人民政府地方志編纂辦公室編 1994.『瀋陽市志 第二巻　城市建設』瀋陽出版社.
孫　鴻金・曲　暁範 2012. 奉天開埠与城市自主性近代化的啓動. 社会科学戦線 12, 99-103.
王　　鶴・董　　衛 2010. 中日対峙背景下的自主城市建設—近代沈陽商埠地研究. 現代城市研究 6, 62-68.
張　金春 2017. 近代沈陽城市"雑巴地兒"研究. 瀋陽大学学報（社会科学版）19-5, 642-646.
張　　曼主編 2007.『北市場旧事』瀋陽市和平区档案局.
岳　永逸 2019.『老北京　雑吧地—天橋的記憶与註釈』生活・読書・新知三聯書店.
中国人民政治協商会議・遼寧省委員会文史資料委員会 1992.『雑巴地旧憶』遼寧人民出版社.